

ラ・セリア

喧騒から逃れて、
贅沢気分を気軽に楽しむ



テラスから差し込む陽光を浴び、琵琶湖を眺めながら頂く贅沢ランチ。胡麻パン、サラダ、ドリンクが付く「パスタランチ(1100円)」、「ラ・セリアランチ(1300円)」とお値打ち。同店では、忘新年会、各種パーティも60名まで対応。

■滋賀県大津市下阪本5-2-2

☎077-578-5785

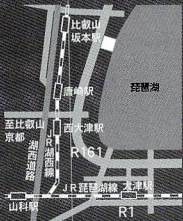
●10:00~18:00 (L.O.17:30)

水休

土日は20:00まで営業

http://www.yamaha-marina.com/

【平均予算】1300円



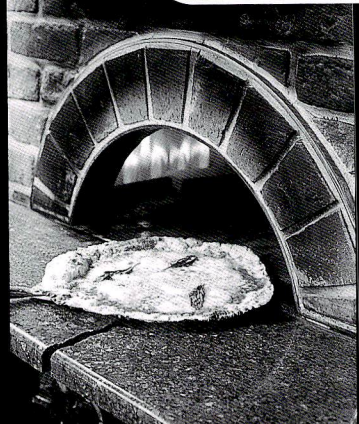
滋賀のINGを
CHECK IT OUT!

口コミ情報カタログ

滋賀エディター版

MACKY IL Pacchia

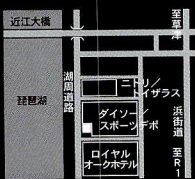
マッキー イル パッキア



あつたかメニューを携えて
20年目への助走開始

石釜ピザや、独特の食感のパスタで名の知れた同店が、冬を迎えて提供してくれるのは、スープバゲッティやバーニャカウダといったあつたかメニュー。この冬、琵琶湖へあつたまりに行くってゆうのもアリかも。

■滋賀県大津市瀬田
萱野浦24-50-4
ロイヤルオーク横ティアラ1F
☎077-544-5980
●11:00~22:00/不定休
P有り
【平均予算】
昼1200円 夜2200円



POWER PLAY SOUND

Music is moistened our life.
Tasteful album is here.
W'd like to find your recommended one.

西浦秀樹

Nishiura Hideki



指輪

South to North Records
1000円(税込)

プロを目指したときに既に、「何でも唄えるよりも、J-POPのパラードに特化したシンガーになりたい」と思っていた彼の念願の1stマキシシングル。他の曲が本文にあるような男の煮え切らない心情が中心であるのに比して、最後に涙を見せ「自ら去りゆく美学」がモチーフになっている。歌詞を手掛けた後も、最も難産だったという、自他共に認める現時点のマスターピース



recommended

01 recommended

Naoyoshi Watanabe
"Friend" (Album Single 8.2 On Sale)

Friend/渡辺直由
東芝EMI 1000円(税込)

プロダクションの先輩にあたり、曲調も声質も似ているという渡辺直由は、「まずこの人を目指して、追い付きたいと思う人です」という最も身近な目標である

02 recommended

HIDEAKI TOKUNAGA
LIVE AND CLIP TRACK (1200円)

LIVE AND CLIP TRACK (ビデオ)
徳永英明
KING RECORDS 7800円(税込)

「結構後を引くというか、往生際の悪い男の歌詞が多いんですよ」。J-POPに目覚めてから本気で「唄ってみたい」と思った、今も「心のシンガー」

03 recommended

田岡/玉置浩二
Sony Music Entertainment 3059円(税込)

ソロでは明るく、少年っぽい朗らかな曲調の玉置浩二は意外な気がするが、「曲調がどうかよりも、歌唱力が許せば唄いたいという(笑)」リコメンドだ

唄っていることより 聴いてもらえる幸せ

小学生時代、みつっ上の兄が虜になったのは、「B'z」や「ZARD」というバンドの数々だった。他にも「どんなときも/横原敬之」「愛は勝つ/KAN」「部屋とYシャツと私/平松愛理」がヒットしたこの時期は、J-POPの黎明期だったかもしれない。

そして彼が小5で出会った運命の曲、「壊れかけのRADIO/徳永英明」。カラオケに行って友人たちに褒められた歌は、兄が聴いていたロック調の曲よりもバラードだった。思えば小学生当時から、自分の歌唱力と特性を判断していた。大阪は堺市に生まれ、シンガーを目指して19歳で上京してからは、代々木公園でストリートライブを始めた。10代が圧倒的に多い場所で、自分の前で立ち止まって耳を傾けてくれるのは30代~40代の女性だった。「オリジナルの他に、徳永さんの曲も唄ってたんですけど、僕の曲だと思って聴いてくれた人もいました(笑)」。働いていた六本木の高級ライブハウスパーでも、主客層の女性たちに喝采を浴びた。「働いていたお店は『HOME』と申しましたね。代々木公園は完璧に『AWAY』(笑)」。

聴き手に合わせて唄うことに、多くのミュージシャンやシンガーはストレスを感じるものだ。「唄いたい曲を唄わせる」と。だが彼は違う。唄っていることよりも、聴いてもらえる事に幸せを感じるのだ。「同世代のバンドの人からは『珍しいねえ』って言われるんですけど(笑)」。聴き手が喜んでくれる歌を唄いたい。23歳のシンガーとしては、あまりの冷静さに舌を巻く。

現代の「金妻」とでも言おうか。彼の前で立ち止まる女性たちが心酔するのは、ハッピーエンドな淡い恋より、バッドエンドな禁断の愛。例えるなら、太陽の光より、マグマの地熱のように内に秘めるが、慟哭を誘う悲恋である。どうにもならないもどかしさと、どうにもできない陰を背負った男の苦悩を切々と唄う。自然、曲調は世を席巻する韓流に例えられ、趣も帯びてくる。

何年後か、いつか再び代々木公園で唄ったときに、目の前に立ち止まるのが10代の女の子たちになったら…。「僕が『アレっ?』と思うでしょうね(笑)」。それは彼の歌が変わったのか、評価する方が変わったのか、いずれにせよ、彼の今後を見てみたいものだ。